

題目 ウマはヒトの感情シグナルに敏感か？－視線追従課題を用いた実験的検討－

氏名 馬場千尋

指導教員 瀧本彩加

感情は、生存や繁殖に影響する場面で生起し、価値ある資源を獲得したり、害をなす事象から回避したりするための行動に個体を導く役割を果たす (Mendl, Burman, Parker, & Paul, 2009)。同時に、周囲の環境についての情報を他者に伝える感情シグナルとしての機能も持つ。また、他者の感情シグナルに対する敏感性は、集団のメンバーと円滑なコミュニケーションをとり、長期的な関係を築く上でも重要な働きをしている。このように、感情を表出し、他個体の感情シグナルに敏感になることは、生物学的にも社会的にも適応的だといえる。この他者の感情シグナルへの敏感性については、近年、同種間だけでなく、異種間においても見られることがわかってきた。特に、イヌがヒトの感情シグナルに敏感であることから、その敏感性の発達に家畜化が影響したと考えられる。しかし、他の家畜動物では、ヒトの感情シグナルへの敏感性に関する研究がまだ進んでいない。そこで、本研究では、イヌと同様にヒトと親密な関係を築いてきたウマを対象に、彼らがヒトの表出する感情シグナル (Happy / Neutral / Disgust) に敏感で、その意味を理解しているのかについて、視線追従課題を用いて検討した。その結果、ウマが視線・感情シグナル呈示中に実験者と同じ方向を見た回数、見ていた合計時間については、感情シグナルの主効果があり、Disgust 条件と Neutral 条件間においてのみ有意差が見られた。これは、感情シグナルが、その回数と時間に有意に影響し、Neutral 条件でよりも Disgust 条件ではそれらが減少したということの意味する。つまり、ウマはヒトがネガティブな感情価をもつ嫌悪感情シグナルを示したとき、その視線方向を見るのを回避したのである。なお、ウマが実験者と同じ方向を見るまでの反応時間については、感情シグナルの主効果のみが見られ、感情シグナルがその時間に有意に影響することがわかったが、条件間では有意差は見られなかった。以上の結果から、本研究は、ウマがヒトの感情シグナル、特にネガティブな感情シグナルを他の感情シグナルと区別し、その意味を理解していることを示唆した。今後、ウマにおける品種比較・他の家畜動物やその近縁種との比較を行うことで、異種間の感情シグナルに対する敏感性がどのように発達してきたのかを解明したい。